

幼稚園での

絵画製作指導の実際

村田修子

絵画製作活動は昔から現在に至るまで幼稚園生活の中で音楽リズムと共に比較的大きい割合を占めている。

音楽リズムの、瞬間的表現とちがってかいたもの、作ったものがあとに残るの
で、「幼児期は作品のよしあしではなく、やろうとする意欲とか、幼児なりにくふうして創り上げていく過程がたいせつなのである」と誰しもが知っているにかか

わらずそれを材料としていろいろな論議されたり、批判や判定の対象となつてしまふことが多い。

もちろん、その作品を見て、「過程はこのましいものであった」という判断のできるものもあるが、全部が全部その過程までも感じられるというわけにはいかない。

また、それをよい、とする基準は、そ

れぞれの物指しであり、そこには或る程度個人個人の好みもある。だから

- ・子どもらしい気持が充分出ているもの
- ・のびのびとした感じのもの
- ・動きが感じられるもの
- ・くふうされているもの

などがよい、と知ってはいても、各人の持っている物指しは三〇センチ指しと違い、長さがまちまちであるため、多く世間に出ている関係書を読んでも、毎日の刻一刻判断していかなければならない場面に直接役立てることはむずかしい。

また、目の前にでき上つてきたものも化学の実験結果のように常に一定のものではなく、幼児自身にある原因や環境からくる原因など、さまざまなことによつてよい状態になったり、好ましくなかったり、いろいろと変化するので、根本の理念は理念としておさえているものの教師としては常に「これでいいのだろうか」

という疑問や、不安な気持ちが起ってくる。こういう気持が、絵画製作についての研究論議を盛んに繰り返し繰り返しやらせる原因のひとつとなっていると思う。

たしかに何年幼児といっしょにすごしていても「絵画製作の指導」については判然としないので、あらたまつて「絵の指導はしていらっしゃいますか?」とか「絵の指導はどのように……?」と聞かれると、どのように答えるのがよいのか答えに困ってしまう。

指導 というからには、それを受けた子どもの側に何かが残り、僅かずつであっても進歩していく状態になることをいうのだと思うが、はつきりとその効果がつかめないために「……のようになっています」と、自信をもってとりたてていうことができない。といって「別に何もしていません」というわけでもない。そこで、どのように子どもたちに接し

ているか、という例を絵画にとつていくつかあげてみることにする。その場合どこまでも幼児の個性によって対する態度が違うので、いろいろの場面ができてくる。たとえば同じ事柄のことについて言う場合でも、次の一、と二、のようにながってくる。

一、いつも何か書いては気軽に教師に見せにくる人(この型の人は、いつも大體きまったものを書くひとが割合に多い)には少し内容についての話しあいをする。一応書いたことについて、またかこうと思うようなはげましを与えてから、帳面形式のものならば、見せてね、といいながら前に書いた部分をめくって見ながら、「前にはこれを書いたのね」とか「これはこういうところがおもしろいわね」「また、いろいろのものを書いてみせてね」というように刺激を与えるようにする。

二、書いたものをあまり見せにきたりしない人がたまたま持って来た場合にはその内容や何かよりも先ず、見せにきた勇気をほめて、一層自信が持てるようにするとともに、極く細かなこと、たとえば「色がとてもきれいわね」とか「前はあまり書かなかつたけれど、この頃はよく書いているから、何でも書けるようになってしまったわね」というように、いろいろの話し合いをして教師に対する緊張感をとり去り、親しみがわくようにさせることに重点をおく。

三、友だちと同じように書くことは書くけれども、ふるえたような自信のない細い線で書く人には、先ず書いたことに対してほめたあと、太くぎゅっと書いた部分とか、または友だちの線の太い部分を見て、「こういうようにぎゅっと書く」と丈夫そうな汽車になるわね」

というような励ましかたをする。そして少しでも変化したときは、「これはずいぶん強そうなお〇〇になったわね」というように、いつも心にとめておいて変化を見のがさないようにすることがたいせつだと思う。

四、題材についてよくみつめて注意深く観察したものを書いたりしたときは、ほかの人たちもそういうことを思いつくように、「ことさらにとりあげる。」「このところをよく見てかいたからほんとうのようだ」というように、自分で発見することができるように方向づける。

これまでは一応自分で書いている人たちについてあげてきたが、これ以前の問題として絵画活動に一向に参加しない人たちに對する指導がある。

参加してこない人は、多く本人自身気が弱いことに加えて、すでに「じょうず

に書かなければならない」というように考えている。その為には、「自分にはとてもできそうにない」ときめてしまつて、クレヨンを握るのさえおそろしいことに思っている。これは家庭の影響によることが多いので、先ず家の人たちに対して幼児画に対する考え方などを話し合うと共に、幼児には抵抗の少ない筆などできれいな色を紙いっぱいぬらせたり、各自持っているクレヨンが、どういう色があるか、ということと紙の上に色をぬったり線をかいてみるようなことから始める。

これらのことは、何か形を書くという気持ちでなくてもできるので、幼児のほうでも「形を書かなくてもよいらしい」と感じて気分がほぐれてくる。そして尻込みすることもだんだんなくなつてくる。一応何かかく人たちにも、こういつたことから始めると案外別の効果を上げ

ることもできる。

また、毎年新しい人を迎えるときよく感じることであるが、入園当初には、自分に与えられた紙やクレヨンなどで実際にたびたび絵を書く。そのようすを見ると、本当に書きたくて一心に書くというよりは、大半の人が今までに家庭でも経験したことがある「絵をかく」ということに逃げていつて、それを楯として、その活動のうしろからみんなのようすをうかがっている。これは「幼稚園にいったらおとなしく何かするものだ」と親にいわれたり、何かして形にのこるものを持って帰ると親が喜ぶ、ということなどもあつて子どもたちの中にすでに「何かするところ」という觀念がうつつけられているからでもあるが、実際みていると一向におもしろくないややつているところが一週間もたつと、だんだんに子ども本来の姿が出てくる。そうなる

と顔や目の輝きが違ってくる。こうなっ
てから書くものは本当の自分のものであ
るから、この殻に入っている時期が長い
とぐあいが悪い。いつも同じようなもの
ばかり書くようになって、これをほぐす
のに時間がかかってしまう。このことな
どは子ども自身だけの問題ではなく、家
庭にある人たちの理解協力も必要なこ
ろである。

こうして思いつく例をあげてくるとい
ろいろであるが、結局は、何にでも自信
をもって当ることができるよう気持を
ほぐしてやることに尽きる。

今まであげた例のどの場面の中にもた
びたび出てきたように、気持をほぐす方
法としてほめることが多い。一説では、
「ほめてばかりいると、かえって逆に、
自分は何でもじょうずなのだ、と違った
自信となるから……。」ということもある
けれども、幼児の場合、気持をほぐし自

信をもたせるには、私は何といってもほ
めることにまきる指導法はないと思う。

ただそれには、前にあげたように、その
人その人によって用いることばを考えな
ければならない。絶対にその人にあるよ
うに吟味してからでなければ、かえって
今あげたような変な自信となって、逆の
効果をもたらしてしまいがちである。と
もすると、この、個性をつかみその上に
たった指導が忘れられがちである。

このように毎日接している間のちよっ
とした変化に喜んだり、殻に入ってたな
なかほぐれない気持に気をくばりながら
ほめたり刺激したりしつつすごしていく
が、幼児という年令からいってその変化
は目にもえないことが多い。だから、指
導法はこうする、というきまったものが
出てこないのがあるが、私は絵画製作は
もとより、どの領域も一つずつの独立し
た教科というよりも、人間を作っていく

ための材料を、教師が考えを整理する便
宜上分科させたもの、という考え方なの
でどこまでも技術的なものの指導という
よりは、全人的な、他のいろいろな領域、
生活全般とつながりをもたせた指導が重
要であると思う。

であるから、すべてに急がず一日一日
を楽しく、極く少しの変化に心の中では
驚いたり喜んだり、困ったりしながら、
しかもそれを子どもたちにさとられるこ
となく、平穏な顔で見つめて、個々に適
した刺激を与えながらいくのが幼稚園で
のすごし方だと思つて、毎日毎日をいそ
がしく過している。

* * *

* * *